

頃日流行 深み井の説

揚州國吳織里の深殿井といふは仕古吳服穴織の二女吾朝よ
 来り始り錦織一折りありて深なる古井のよし又北の當麻の
 寺の深井と稱するものの中將姫受陀羅は甚く深と深と
 旧地とも是いふの世に物語にて只人の傳ふは
 千茲今年天保十二年丑歲九月月中旬より揚州
 東城郡四天王より東本所村とあるを本と始り
 猪洞野産湯賣の宮又今宮茶臼山の傍に
 ある田畑井戸れ水にて種くさぬぐの色は深
 とては方へ人自糸といふ又白布小切とつけ
 藍とすの深美とす或は藍色濃茶色とす
 笑くはよること實殊れ事どもあり夫
 水の氣化の深王者は徳淵泉に在り時代昇
 平ある則に醉泉出と云傳ふれば井水は自注
 種くさぬと深るの深と云と云ふ天地の深け
 ひと云納まる君が代に御魂と作ぐべしと云ふ
 尤深きの種くさぬと云ふの深けありと云ふ
 其下流の五倍子○石榴皮○桃皮○梔子○薑草
 わらひ○檉木○淡竹皮 づきも煎下汁にてそむむ
 ○又小豆の糞汁・青菜の糞汁をもよ



書林兼草紙 屋
 美可理家山守戲縁

